



【#1】チューリップのはなし

Text by 小助川駒介

Komasuke KOSUKEGAWA

四月の明るい光が部屋に溢れていた。

ドレッサーの鏡の中に、私の顔が映っている。

一輪のチューリップが、私の背後に活けられている。

その花びらに、ひとりの少女が腰掛けていた。

私は振り返ってチューリップを見た。

少女はいない。

しかし鏡に映るチューリップには、

やはりひとりの少女が腰掛けていて、

じっと私を見つめている。

すこしだけ考えてみて、

私はこの事態を受け入れることにした。

私には幻覚の経験はなかったが、

見えているものは見えている。

否定したところでなにも始まらない。

少女の顔に見覚えはなかった。

少し首を傾け、両足をぶらぶらさせながら、

覗き込むように私を見ている。

私は鏡に映る彼女の、黒い瞳に焦点を合わせた。

その瞳に、私の意識は吸い込まれていった。

明るい空間の中に、雌蕊の形をした椅子があり、

そこに少女が座っていた。

大聖堂のようなその空間は、

ゆるやかな曲線で構成されていた。

おそらくそれはチューリップの中なのだろう。

少女は、私の目を見て話し始めた。

「私は、いつかの、あなた」

少女は言葉を続けた。

私？いや、彼女は私にまったく似ていない。

「過去のどこか、未来のいつか」

それだけいうと、彼女の姿はゆらぎ、

次々に、姿を変え始めた。

最初は、蛙だった。それから、鼠。

私が瞬きするたびに、

彼女はその形態を変えていった。

名前も知らない、魚、鳥、植物、獣、おそらくは微生物。

そして時に、性別も年齢も、さまざまな人間。

私は自分が何を見せられているのかわからなかった。

しかし、目の前で繰り広げられている「これ」を

否定することはできない。

やがてルーレットの玉が、

ある数字の上で止まるように、

彼女は、ひとつの姿に形を定めた。

古い、を構成するさまざまな要素があるならば、

それらを凝縮させたような老婆がそこにいた。

私にはそれが、私であることがすぐにわかった。

深い皺に、埋もれるように、

その眼は、じっと私を見ていた。

懐かしむように。愛おしむように。

ひからびた唇が小さく動いた。

「ぜんぶ、つながっている」

皺の中の瞳が鈍く光り、一筋の涙が滑り落ちた時、

私はまたどこかへと吸い込まれていった。

目を開くと、私はもとの部屋に戻っていた。

いつのまにか夕方の光に包まれている。

鏡の中にいるのは、おそらくは「今」の私だ。

私は、背後にあるはずのチューリップに目をやった。

チューリップはさっきより少しだけ

花卉を開いているようにも思われた。

少女の姿は、そこにはもうなかった。

チューリップ或る日或る刻老い易く

三橋鷹女